校長室だより～燦燦～ №７２２

とはいえ

2023.3.23

ここ数年で一気に広まり認知されるようになった言葉の一つに「ＳＤＧｓ」がある。あっという間に教育界にも入ってきた。学校の教育活動にも影響を及ぼしている。これを扱うことが、さもいいことだというような風潮がある。新しいことに取り組むことが、さも特色のあることだと考えているふしがある。

では、ＳＤＧｓについての基礎的な理解は、どのくらい進んでいるのだろうか。理解されたとして、次の関心は、具体的にどうやってＳＤＧｓを自分たちの活動に取り込んでいくかに移っていく。すると、「とはいえ」となる。ＳＤＧｓが大事なことはわかりました、の後に、次のようになる。

とはいえ、実際に達成するのは難しいですよね。

とはいえ、一人が、１社ができることなんて限られていますよね。

とはいえ、現場は忙しいし、新しいことをするゆとりなんてありません。

挙げればきりがない。今までも、似たような動きはあった。結果はどうだったのか。その多くがうまくいかなかった。ＳＤＧｓも二の舞になるのだろうか。そうならないためには、今までとは違ったアプローチが必要になる。

変化を生み出していこうとするとき、現状からどんな改善ができるかを考えて、改善策を積み上げていくような考え方を「フォアキャスティング(forecasting)」という。それに対して、未来の姿から逆算して現在の施策を考える発想を「バックキャスティング(backcasting)」という。

フォアキャスティングは、過去と現在のデータに基づき、実現可能な目標を設定してその達成に取り組むアプローチである。現在から目標に向けて一歩一歩前方（フォア）へ進行して問題解決に向かっていく手順になる。多くの学校が、この方法での取組を行っている。

これに対して、バックキャスティングは、過去や現状にとらわれずに、こうありたいという未来の姿を描き、実現のための取組を逆算的に組み立てるアプローチである。未来の目標から現状までの手順をバックさせるのである。

ＳＤＧｓには、バックキャスティングが必要なのではなかろうか。フォアキャスティングで達成できるほど甘くはないだろう。学校はどうだろうか。例えば、働き方改革である。これもフォアキャスティングでは、なかなか進まないのは自明の理である。働き方改革にこそ、バックキャスティングが必要である。

フォアキャスティングは、現状を考えた改善的なアプローチ、バックキャスティングは、創造的破壊を生み出すアプローチである。働き方改革には、「とはいえ」を使ってはいけない。学校にも、バックキャスティングの発想が必要である。